

令和 2 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2770302202		
法人名	社会福祉法人 月の輪学院		
事業所名	グループホーム つかさの家		
サービス種類	認知症対応型高齢者共同生活介護		
所在地	大阪府寝屋川市仁和寺本町2丁目3番5号		
自己評価作成日	令和2年11月1日	評価結果市町村受理日	令和3年1月4日

【事業所基本情報】(介護サービスの情報公表制度の基本情報リンク先URLを記入)

https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/27/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2770302202-00&ServiceCd=320

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 介護保険市民オンブズマン機構大阪		
所在地	大阪府大阪市東成区中道3-2-34(JAM森の宮事務所2F)		
訪問調査日	令和2年12月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長年入居されている方が、例え認知症が進行し言葉でご自身の思いや意向を伝えることができなくても、長年共に支え合いながら暮らしてきたスタッフの強みを生かして、入居前～入居時～入居後の歴史を振り返ることで本人の声なき声を感じ、スタッフで話し合い、支援の目標に向かって一丸となって日々努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

知的障がい児の支援事業を運営している法人が、子どもから高齢者まで一貫して福祉サービスを展開しようと設立したグループホームです。豪邸を改装したホームは閑静な住宅街の一角にあり、手入れの行き届いた庭園では、季節毎に違う景色を楽しむことができます。法人の理念を基に皆で作った「あなたの笑顔は私の笑顔。あなたの涙は私の涙。そんな家族になりたい」「個性を尊重し、自分らしさを大切に」を今年の「私たちの理念」に掲げ、取り組んでいます。法人全体で事業を支えるシステムが充実しており、職員間の人間関係がよく、チームワークのよい職場環境は、職員の定着に繋がっています。離職者が少なく、利用者との関係ができていて、質の高い個別支援が実践できています。専従のキッチンスタッフが作る心こもった手作りの食事が美味しいこともホームの大きな自慢のひとつです。看護師であり計画作成担当者でもある管理者は利用者・家族・職員から安心と信頼を得ています。ホームでの看取りも行い、職員は看取りの経験からの貴重な学びを日常のケアに活かしています。コロナ禍で何かと制限のある毎日ですが、利用者が安心して楽しく過ごせる毎日の暮らしのために管理者以下職員一丸となって取り組んでいるグループホームです。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を元にスタッフ全員で考えた「私達の理念」、今年度は「あなたの笑顔は私の笑顔。あなたの涙は私の涙。そんな家族になりたい」「個性を尊重し、自分らしさを大切にする」を考え、事業所内に掲示、スタッフには全員携帯してもらっている。	法人理念を基に「私たちの理念」を毎年、職員全員で作っています。今年は「あなたの笑顔は私の笑顔。あなたの涙は私の涙。そんな家族になりたい」「個性を尊重し、自分らしさを大切にする」を理念としています。理念は、リビングに掲示しています。また、職員は理念を携帯し、日々の支援に活かしています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所の前の道路の落ち葉拾いや清掃を利用者としている姿を見て声を掛けてくださる近隣の方もおり、顔なじみになっている。近所の方が収穫した野菜を持ってきていただいたり、段ボールを事業所に貰いに來られたりする。	ホームの庭で利用者と職員が落葉拾いをしていると声をかけてくれる、野菜を届けてくれる、などは日常の光景で、地域住民の方とは隣近所の付き合いができる関係が続いています。近所の方が、段ボールをもらいにホームに来ることもあります。米を購入する近所の米屋は、美味しいご飯にこだわるホームの考えを理解し便宜を図ってくれています。コロナ禍で地域との交流も何かと制限がありますが、買い物に行くコンビニの店長とも顔なじみになりました。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎週1回、ブログで情報発信し、つかさの家の日常を知ってもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催している。コロナの状況の中では、会議のメンバーの方には資料を渡して電話などを通じ意見交換をしている。自治会長などには地域の集まりの状況やコロナに関しての情報交換や資料を渡している。	運営推進会議は2か月に1回開催しています。市議員、自治会長、老人会長、民生委員、地域包括支援センター職員、法人代表等が参加し開催してきました。会議では「身体拘束適正化委員会」を合わせて行い、身体拘束について参加者全員で学習する機会となっています。コロナ渦中では感染予防のため、会議のメンバーに資料を送付し電話で意見を聞いています。コロナの資料は興味深く読んだとの感想や、厳しい状況下での看取り実施への激励などメンバーから意見が寄せられています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	今年度地域包括支援センターからの虐待事例の利用者の入所を受け入れた。その際、市の高齢介護室の方、地域包括の担当の方、医師、在宅のケアマネージャーと情報を密にし、協力関係に努めることができた。	地域包括支援センターより、自宅での生活が難しくなってきた方の入所依頼があり、受け入れに際して市の担当者、地域包括支援センター職員、ホーム職員と協議を重ねる機会があり、市との連携がより密になりました。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は、門扉および玄関は開放し、施錠はしていない。身体拘束については勉強会であらためてスタッフ全員に具体的な行為を把握してもらい、運営推進会議でも話しあっている。	日中は門扉、玄関は開錠するなど、身体拘束廃止に関する指針を作成し、身体拘束廃止委員会を開催、定期的に研修も行っています。運営推進会議でも身体拘束について参加者と一緒に考える機会を作り、少しの妥協が身体拘束に繋がる時のホームの考えを参加者に理解してもらいました。管理者は職員のストレスについても配慮し、話をしっかり聞くことを心がけています。離職者が少なく、長く一緒に働いている同士だからわかることが強みとなっています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	スタッフ間同士が意見交換できる環境の中で、言葉づかいなどは、特にリーダーが中心となって一人一人とじっくり話す時間を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者が実践リーダー研修を受講した内容についての勉強会で、人権・権利擁護については利用者の人権について特に話し合う機会があった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	コロナウイルスの流行の中で入退居があり、コロナ対策や特に病院への受診及び、面会など不安な点について詳しく説明した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	1カ月に1回、管理者から家族へ自筆での手紙、担当職員からの利用者の状況の手紙を出し、変化が生じた場合には直接電話にて状況を説明し、不安な点について聞く機会を設けている。 遠方の方とは3年以上に渡り、手紙のやりとりがある。	毎月1回家族に利用者の写真を添えて担当職員が手紙を書いています。手紙は利用者の生活の様子がよくわかると好評を得ています。ホームのブログを開設して内容を随時更新して家族に伝える手段としています。毎月、手紙のやりとりが続いている家族もあります。コロナ禍で、家族の面会制限が続く中、サンルームを利用しての面会を工夫しています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は年1回、パート職員も含めた全員に、仕事及び待遇面などについてアンケート調査を行い、その結果を踏まえて代表者と意見交換をし、率直なやりとりが行えている。代表者はコロナウイルスについても職員の不安を軽減させる対策グッズを早期より協力して備えることが出来ている。	毎月の月例会で職員の意見を出し合っています。管理者は、会議のほか、日常的に職員の意見や要望を聞いています。管理者、介護職員、キッチンスタッフそれぞれが相手の仕事に敬意を払い感謝しあうチームワークのよい職場風土です。また、法人全体で事業を支えるシステムがあり、安心して働ける環境は職員の定着に繋がっています。コロナ感染防止のための備品も積極的に備えています。利用者の重症化等で利用者の退居が続きましたが、毎日利用者に満足してもらおうこそが何より地域・関係者から理解・支持が得られることになると、管理者・職員一丸となって取り組んでいます。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職員がやりがいを感じられるよう、研修への参加なども積極的にすすめてくれ、病欠などが出た際、法人からの応援もいただいている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は実践リーダー研修、リーダーは1名実践者研修を受講し、もう1名12月に受講予定である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	寝屋川市のグループホーム同士の交流会の代表者と話し合う機会をいただいている。今年度は他施設のグループホームの施設概要などの冊子を作成した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設入居前は必ず本人宅に訪問、実際話しをし、ケアマネージャーとの情報交換の上、体験入居をしていただいている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様には、グループホームの役割を説明し、利用者及び家族の不安なことが何なのかを一緒に寄り添いながら、どのサービスがいいのかを考えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅でのサービスの状況、家族の状況を踏まえて管理者がケアマネージャーと兼務しているため今必要なサービスが何なのか違うサービスも含め検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員も利用者も支え合いながら、一緒に暮らしていける家族のような関係作りを目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者一人一人の大切なキーパーソンの家族様を知ったうえでその方との交流を継続する為、遠方の方には手紙を書いたり、電話などをしたりしている。近くの方には外出などしてもらえよう、声掛けをしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親族は遠方だが、友人と呼ばれる方が1カ月に1回必ず電話もしくは訪問してくれる方がいる。 3年以上入居している利用者と定期的に通っていたお寿司屋が利用者の馴染みになっており、本人から行きたいという希望もある。	職員は、これまでの馴染みの関係を少しでも継続することが利用者にとって大切なことと理解し、支援に努めています。また、入居後の新たな馴染みの関係づくりも大切にし、新しく入居する利用者は歓迎会を開いて迎えています。歓迎会では、迎える利用者好きなものを聞いて提供します。庭には亡くなった利用者の家族からもらった桜の木があり、利用者の名前をつけ、偲んで眺めることもあります。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ほとんどの方は、リビングで過ごしそれぞれの座る場所で落ち着かれ、自然と関係性が出てきている。いないと心配される方もおられる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された方のご家族が、衣服や日用品、本などを持ってきてくださり、その後の交流も続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	長い年月、施設で生活している利用者さんの思いや意向は、どうしてもスタッフ本位になりがちであるが、原点の入居してきたときの利用者さんの思い、家族の意向を振り返り、認知症が進行しても最初に戻って、皆で話し合い、希望を持った支援の方法を検討している。 カンファレンスシートを用いて検討している事例もある。	職員全員で考えた「今年の理念」の一つに「個性を尊重し、自分らしさを大切にする」を掲げ、個別ケアを実践しています。職員は、利用者との何気ない会話や動作から本人の意向や要望を把握し、管理日誌や介護記録に残し、職員間で共有しています。管理者は職員に「利用者本人の意向が把握でき難い時は、最初の原点に戻って、何が好きだったか・どんなことを喜んでいたのか思い出そう。声なき声を聞こう」と伝えています。離職者が少なく、利用者職員との馴染みの関係ができていることも、質の高い個別支援に繋がっています。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生きてきた歴史はケアマネジャーや家族様に話しを聞き、本人の部屋などを見させていただき、支援に役立っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今まで在宅で生活していた方は過ごし方なるべく変えないように見守りながら、寄り添い、手助けするよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当スタッフからの支援の状況と意見交換の場を1カ月に1回は設け、ケアマネジャー及び看護師からの情報や支援のアイデアなどを出し合い、介護計画を作成している。 利用者にまず希望を聞くように努めており、その度時間があれば、少人数でも支援についてのショートカンファレンスを行っている。	利用者・家族の思いや希望を尊重した介護計画になっています。基本は6ヶ月毎に見直し、状態に変化があった場合は随時見直しています。モニタリングは2ヶ月毎に行っています。サービス計画書(1)の「利用者及び家族の生活に対する意向」欄は、利用者や家族の「話し言葉」で表現し、意向が理解しやすいように工夫しています。計画作成担当を兼務する管理者は「利用者・家族の思いを第一に」を大切に計画を作成しています。	介護計画のサービス内容と介護実践・記録、モニタリングが連動できる仕組みを考え、よりその人らしい暮らしの実現に繋がることが期待されません。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	状態に変化のない利用者は個別の介護記録に記入し、観察が密に必要な利用者には重症記録、看取り介護記録などを取り入れて情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	不安を訴える利用者に対しては日中、皆が過ごすリビングにソファベッドを設置し、人の声が聞こえる中で午睡などしてもらっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の清掃やふれあいサロンに参加して地域の方々と工作や手芸を楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医を継続されてる方と、訪問診療で定期的に診察してもらう方と、本人の状態、家族の希望に応じて対応している。訪問診療の際は、家族の面会にあわせてことで医師から家族に状態を、その都度説明してもらっている。	利用者、家族が希望するかかりつけ医の受診を継続することができます。現在は1名、職員の介助で受診しています。精神科・整形外科などへも職員が同行しています。協力医による往診は月1回、内科・皮膚科などの症状にも対応してもらっています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	管理者が看護師を兼務しているため、個々の利用者の変化の対応を早急に行うことができる。発熱時の相談や内服薬の対応など医師に適切に情報伝達が出来、家族にも病状の変化時には詳しく説明している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院のケースワーカーとはケアマネジャーおよびリーダーが中心となって支援している。入院時はケアマネジャーが同行し情報伝達、担当は必ず面会に行くと共に退院時は家族同席の上で、内服薬や生活の中で気を付けることなどのカンファレンスにも参加している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今年度は2名の看取りを行った。酸素吸入も初めて導入し、スタッフにも指導し使用した。1名は家族及びスタッフに見守られながら看取りを行い、エンゼルケアも家族と一緒に行った。亡くなられた後のスタッフが感じた気持ちをそれぞれの時間を設けて話し合うことができた。亡くなられる過程についての知識、バイタル、呼吸状態などの勉強会も行った。	目標達成計画に挙げて取り組んだ項目で、今年度は2名の看取りの支援を行いました。職員の不安や心配に応じて、7月と9月にターミナルに関する研修を実施し、看取りの振り返りも行っています。ホームで最期を迎えたいと病院から戻り、看取った事例もあります。また、家族と共にエンゼルケアを行ったり、「ホームでの生活で母の知らない面をいくつも見る事ができた。仲良くしている姿に安心した。ここに入れてよかった」と感謝されたこともあります。家族が泊まれる部屋も用意しています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会で窒息時の対応について実際に利用者側、スタッフ側に分かれて対応、応急手当について学ぶ機会があった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の訓練は年2回継続して行い、消防署に報告している。 地震、台風に対しては過去に実際に困ったことをスタッフで出し合い、備品や非常食を備蓄している。必要なものは随時追加購入しており、缶詰等の寄付もある。事前に予測できる災害に関してはスタッフの自宅や通勤手段に合わせて臨機応変に対応している。 地域運営推進会議にて災害時に当法人施設を避難所として活用してほしいことを呼びかけたり、地域の参加者に過去の淀川堤防の決壊時の体験談を発表して頂いたりし、お互いの災害に対する意識の向上にも努めている。	火災時の避難訓練を年2回実施しています。災害時のマニュアルがあり、地震や停電・積雪時の対応などの項目が挙げられています。風水害対応や、2階からの避難方法や手順などのマニュアル作りは今後の課題としています。隣接する同法人の施設からの応援が得られるため、安心感があります。災害時はホームを避難所として使ってもらおうよう、運営推進会議で提案しています。	利用者の介護度が高くなっています。いざという時に備えて、全職員で対応の検討が望まれます。夜間など、いろんな状況下でシミュレーションされたらいかがでしょうか。緊急時連絡の訓練なども入れて、重要事項説明書に合った訓練(月1回)を実施し、利用者の安全な暮らしに繋がることを期待されます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権についての勉強会を管理者より行った。男性スタッフの多い中で女性の利用者のトイレのパットの確認などはプライバシーを特に注意してさりげなく、恥ずかしい気持ちにさせないように注意を払っている。同性介護を優先させるように努めている。	接遇について、チェックリストを用いた研修を実施しています。介護する側・される側の区別にならないよう、過度な敬語は避け、また、馴れ馴れしい声かけで利用者には不快な思いをさせない言葉遣いに配慮しています。日常の介護場面でも、ドアの開け方、羞恥心への配慮に留意しています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	1ユニットという少人数の中で、一人一人と必ず個別で話しをする機会を日常の暮らしの中で、一緒に散歩や洗濯物をたたみながら持つように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝食は一人で食べたいという希望の人には時間をずらして対応している。 1日の流れは決まっても本人の思いを最優先にするよう工夫している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服などは好みのものを本人と雑誌などで選び購入している。 化粧品なども希望のある人はしてもらい、爪やカットなども馴染みの職員がしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理の献立は業者に依頼しているが、キッチンスタッフは利用者の好みに応じてアレンジして調理してくれている。一口大や刻み食など対応し、利用者の好き嫌いも把握している。ホットプレートで一緒にケーキを焼いたり、デザート作りにも挑戦している。材料なども歩いて近隣のコンビニエンスストアに買いに行っている。 朝食の洗い物を自分の役割として、してくださっている利用者もいる。	食事が美味しいことはホームの大きな自慢のひとつです。食材配達サービスを利用していますが、専従のキッチンスタッフの工夫で、品数多く変化に富んだ味に調理されています。「食べることは生きること」ととらえ、美味しい米にもこだわっています。勤続年数の長いキッチンスタッフは、利用者だけではなく職員の味の好みや好き嫌いまで把握し、一人ひとりの好みに応じてアレンジしています。職員も利用者と同じものを食べています。コロナ禍で表立った行事ができないので、季節の美味しいものや特別食で楽しんでもらいました。朝食の洗いものやテーブル拭き、お茶の用意等、自分の役割としている利用者もいます。利用者の食事に対し前向きな努力を惜しまないキッチンスタッフの姿勢は、利用者だけでなく職員にもいい影響を与えています。 ※コロナ禍での評価実施のため、食事は別室にて。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分は1日1500ccを目安に、6～7回に分けて取るようにし、苦手な人には果物ジュース、ゼリーなど個別に対応している。食べる量もキッチンスタッフ全員カンファレンスで話し合い、情報共有している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	むせが酷く、誤嚥を繰り返す人には必ず毎食前にうがいを施行している。義歯の利用者は夕食後に預り、洗浄液につけている。週に1回訪問歯科を取り入れて、個々の口腔状態に応じた口腔ケアを行うようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を用い、個々の尿意のパターンを頭に入れ、声掛け誘導し失敗しないように努めている。車椅子の方もオムツの方も、必ずトイレに座ってもらい、自然に便が出るよう支援している。 昼と夜のオムツの種類をかえたり、本人の希望で安楽尿器なども使用している。	排泄表に細かく記録され、タイミング良い声掛けで排泄の支援をしています。おむつ使用の方は3名いますが、毎朝トイレに座ってもらうことで排便が習慣づけられた事例があります。布パンツから紙パンツに変える必要がある時は、本人の尊厳を損なわないように配慮して行っています。トイレは3か所にあります。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤は服用しないよう、お茶(ゴボウ茶)、オリゴ糖、ヨーグルトなど使用している。朝一番にトイレに座ってもらうように努力している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	2~3日に1回入浴の支援を行っている。同性介助を基本とするが、異性の場合、プライバシーには配慮している。好みの入浴剤を入れる利用者もいる。1対1で個別入浴である。介護度が高くなっており、湯船に浸かることが困難になってきている利用者の方にもリフト入浴の設置を予定している。夕方、昼間の入浴の希望を利用者に聞いている。	概ね2・3日に1回の入浴を支援しています。入浴を好まない利用者には無理強いをせず、週1回は入浴できるように試みています。代わりに清拭を行い清潔を保っています。個浴でゆっくり入浴できるよう支援していますが、介護度が高くなってきた利用者には2人介助が必要となってきており、安全・安心な入浴のためリフト設置が待たれるところです。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午睡に自分の部屋に行くのが不安な人にはリビングのソファベッドで横になって安心してもらえるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の管理は看護師が行っている。変更、増量、減量などはその都度、スタッフに説明・報告事項にて書面に出しどのような症状が出るかも説明し観察してもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の長年の趣味である植木を入居時にもってきて育ててもらい、花を玄関に飾ってもらっている。 昔働いていた仕事をヒントに作業(紙おり)などしてもらい役割を持ってもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	重度化しているため、近隣の散歩、近くのコンビニエンスストアなどの外出になっているが、庭に出たり、サンルームでお茶を飲んだりしていると、外に出るのを拒否する利用者も、利用者同士が誘うことで散歩に行くようになった事例がある。	例年に行われている外出もコロナで困難になっています。近所のコンビニには買い物が見え、畑や柿やミカンの木を見て季節を感じています。昨年新たに設置されたサンルームは、手入れされた庭を眺め、外気に触れる機会に役立っています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を家族の了解の元自分で財布をもって管理している人もいます。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をしたいという人には自由にできるようにしている。携帯電話を所持して好きな時にかけるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関は常に開放している。居間に続くサンルームがあり、家族との面会や利用者同士の憩いの場になっている。庭を見ながら食事もし、花を見ながら季節を感じてもらえることを大事にしている。台所はカウンター式になっており、自由に入りし、作る音や匂いを心地よく感じることができる。	共用空間でコロナがまん延しないよう、対策を実行しています。食事は時間をずらして2部制にし、職員手作りの衝立を設置しました。換気に努め、スリッパも定期的に消毒して替えています。加湿は加湿器のほか、見た目がおしゃれな自然加湿グッズを利用しています。オゾン発生器を新たに購入し設置しました。ウイルスを不活性化し、消臭に効果を発揮しています。※コロナ禍での評価実施のため、職員聞き取りのみ。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	サンルームで自由に話しやすい空間が出来ている。居間には自分の落ち着ける場所があり、ソファで座られたり横になられたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の馴染みの物で安心して生活できるよう、本人にその都度確かめている。服の好きな人は毎日好きな服を選べるように工夫したり、横になった時やベッド上で座っているときの視界に、安心できるものを置くように心がけている。	居室への持ち込みに制限はありません。入居前に配布するチラシにも「在宅で使用していた馴染みの家具を持参してください」と案内しています。使い慣れたタンスや布団、好みのカーテンをつるし、絵やポスターを飾ってゆったり過ごせるよう工夫しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所や洗面所の場所が分かるよう紙を貼っている。段差はあるが根気よく声掛けをし安全には配慮している。		